

行きたたされ共せ給ふ。父くいたひをばしめんと。此の御わたの御
 敷乳母をちやめのことや女房たち。その外有りあふ者も。ももたんとけり。中
 納言は餘りのことの悲を。左近を召され。いかた左近をけ給はれ。此程都にかく
 れる。村岡のまがらぎにて名譽の博士の有りとさく。つれて参れを仰せけるに。う
 け給はると申して。つれて御所へまゐりける。いたはじや。父くいたひもみだり所も。
 耻も入めも入らばじ。博士に對面めされし。いかにまがらぎをけたまはれ。それ
 入のふらひにて。五人十人ある子だ。いづれおるかはさかからひ。みづからはたら獨
 の姫を夕のくれほじ。行きたたされまうし。十三寅の年。生れてより
 も。のわたは。様よりきたへおる。たにをちやめのことのしき参ひて。あまき風をま
 ひし。まよひ變化のわざは。みづからなまもる。おんまひしては行のり
 き。袂を顔におしめて。トひ給へ。はかせにて。料足萬疋はかせが前に積ませし。
 姫が行方を知るふらば。數の賢をよす。よくトひ給ふ。まよひ博

士はめいしにて。一つの巻物とりいだし。件の体をみわたしよ。手をちやうと
 ち。姫ぎみの御行方は。丹波の國大江山の鬼神がわざにて候ふり
 御命には子細ふし。猶某が方便にて延命を祈らん。何の疑有るべきぞ。此ト形
 をよく見るに。觀世音に御祈誓あり。誕生ふりしその願。いまだ成就せぬ御咎と
 みえてあり。觀音へ御まゐりあり。まよひに御祈誓まじまは。姫君直ぞうぶく都にかへ
 らせ給はんと。見透すやうにうらふひて。博士はわが家にかへりけり
 中納言もみだり所も聞し召し。これは夢かや現かやと敷かせ給ふ御有様。何にだ
 とへんかたもふし。中納言殿はおつる涙の隙よりも。急ぎ内裏だいらへ奏聞ありければ。
 帝公卿覽まし。くきやう大臣集りて。色々詮議まらし。あり。その中に關
 白殿進み出で。嵯峨の天皇の御代の時。是に似たる事の有りしに。弘法大
 師の封じ。國土をわけて子細ふし。まよひがら今に賴光をめされし。鬼
 神つてまよひの給は。まよひつてまよひつてまよひつてまよひつてまよひつてまよひつて。此入

女には鬼神も立ちをのたまて。おそれなすつて給はる。此もの共に仰せ附けられ候へかし。帝げにも思し召し。頼光を召されけり。よりみつ勅をうけ給はり。急ぎ參内仕りければ。帝最覽まじして。いかによりみつうけ給はれ。丹波の國大江山には。鬼神が住みて仇をなす。わが國ふれば卒土のうち。いつくに鬼神の住むべきぞ。况やまづかきあたりにて。人を惱ますいはれふし。平げよこの宣言あり。よりみつ勅命うけ給はり。天晴大事の宣言あり。鬼神は變化の物ふれば。討手向ふと知るふらは。塵や木の葉と身を變じ。我等凡夫の眼にて。みつけん事は難かるべし。よりみつ勅をばいかにぞむべき。急ぎわが家に歸りつ。人々を召しよせてわれらむかに叶ふまじ。佛神に祈をかけ。神の力をたのみべし。尤きかるべしとて。よりみつ勅をばいかにぞむべき。入藩に社參ありければ。つとまきとまきは住吉へ。とまみつとすあだけは熊野へ參籠仕り。とまんとの御立願。もとより佛法神國にて。神も納受まじして。いつれもあらたに御利生あり。よろこびにまじりて。皆々わが家に歸りつ。いづつ所に集りて。色々詮議まじりて。よりみつ仰せけるは。この度は人數多にて叶ふまじ。以上六人が。山ぶしに狀をかへ。山路に迷ふ風情にて。丹波の國鬼が城へたづね行き。栖だにも知るふらは。いかにも。武略をめぐらして。討つべきこと易かるべし。面々笈を拵へて具足冑を入れ給へ。人々いかにとありければ。うけ給はると申して。面々笈を拵へける。まづ頼光の笈には。らんでん鎖と申して緋威の御甲。同色の五枚冑に。獅子王とこそ申しけれ。ちすねと申して。劍二尺一寸候ひしを。笈の中にぞ入れ給ふ。保昌は紫おどしの腹巻に。おふとけのひんごを添へ。岩切と申して二尺ありける小薙刀。二重にめねを延べつけて。三束あまりにねち切りて。おひの中へぞ入れ給ふ。つふは崩黄の腹巻に同色の甲をぞへ。鬼切と云ふたちを笈の中にぞ入れ給ふ。定光と季武さんごきも。思々の腹巻におふとけの甲をぞへ。いつれもおどらぬ劍を笈の中にぞ入れにける。さへんご名づけて酒を持ち。火うち。つけたげ。あまがみを笈の

うに取つつけて。思々のうち刀をさへす。かけほろのかひ。金剛杖をつきつれて。日本國の神ほごけに。深く祈誓を申しつ。都を出で、丹波の國へ急がせ給ふ。此人々の有様。いひある天魔はさめん。恐をふすべしと覺えたり。いそがせ給へば。程もふく丹波國に聞えたる。大江山にぞつき給ふ。柴刈人に行き逢うて。頼光仰せけるやうは。いかに山人。此國の千丈嶽はいつくぞや。鬼の岩屋を懸に教へたべしと仰せける。山人この由承り。此みねをあふたへ越えさせ給ひつ。又谷峯のあふたへ。鬼の栖を申して人間更に行くことふしと語りけり。頼光聞し召しさらば此みね越えやとて。谷峯よと分け上り。ある岩穴見給へば。柴の庵の其中に翁三人ありけるを。頼光此よし御覽して。いひある人にてましますぞ。無覺束と仰せける。翁答へて仰せける。我々はまよひ變化の物にてふし。一人は津の國のかげの郡の者にてあり。一人は紀の國のおふし里の者にてあり。今一人は京近き山城の者にてあり。此山のあふたふる酒呑童子といふ鬼に。妻子をさられ

無念を。その敵をも討たなため。このころこゝに來りたり。客僧たちをよく見るに。常の人にてまします。勅ちやうを蒙りて。酒をいづるを亡ぼせこの。御使をみえてあり。此三人のおきふしを妻子をさられて候へば。是非先達を申すべし。笈をもおろし心ごけ。つかれをやすみ給ふべし。客僧達を申されける。頼光此よし聞し召し。仰の如く我々は。山みちは踏み迷ひくたびれて候へば。さらばつかれをやすめんごおひごまをおろしおき。さへ酒をどり出だし。三人の人々に御しめしめせとて參らせける。おきふ仰せけるやうは。いかにもして忍び入らせ給ふべし。かの鬼常にごけをのむ。その名をよそへて酒呑童子と名付けたり。酒をもち酔ひて臥したる時は前後も知らず候ふり。此三人のおきふしをいかに不思議のまじをよす。その名をいんべんきごくとしめしめいひ。神の方便鬼の毒酒を讀むもいそがし。この酒鬼が呑むふらば。飛行自在の力も失せ。切ることも突くことも知るまよきあり。御身たちが。此酒を飲めばかへつてくすりなる。かていんべんきごくと酒は。後

の世までも申すべし。おぼしかりんをのみまじしなり。はしきふんをかり出したし。御身は是を着て。鬼神が首を切り給へ。何の子細もあるまじきなり。件の酒を相奉けて。あつみりにまくなれける。六人の人々は此よしを御覽せし。あつは三丁町の御神の。いれまじ現しませすなり。感涙肝に銘づく。かたわりのいふも中々にいらは。いひひがなし。その時おきは岩屋を立ち出す。おぼしをせんだち申さん。せんどやうなけを登りつ。くさき岩穴十丈ばかりくり出で。細谷川に出で給ひ。もきお仰せけるなりは。此河上をのぼらせ給ひて御覽せよ。十七なる上臈のおぼすべし。くはしく逢ひていひ給へ。鬼神の討つべきの時。おぼしわれらもみづぐ。住吉ノ幡熊野の神。いれまじ現し来るなり。かき消すやうに失せ給ふ六人の人々は此よしを見給ひて。三丁の神の歸らせ給ふ御めいな伏し拜み給ひつ。教にまじせて河のみなをのぼらせ給ひて見給へ。あつこの如く十七人の上らふの。血のいれたるものを洗ふなり。涙もまじしませすなり。より

みつ此よし御らんて。いひあるものごと問はせ給へば。姫君此よし聞し召し。あつ候。みづからは都の者にて候が。ある夜鬼神につかまれて。是まじまわりて候が。いひこまじたりの父母や。あつあめのついでに逢ひませば。くんのあつこを察せは。あはれおぼしめせなり。あつあめをなまき給ふ。あつる涙のひまより。あつあめあつしや。此所は鬼の岩屋と申して。人間更に來る事なし客僧等は是まじ來らせ給ふなり。いひこまじしてみづからは都へ歸してたび給へ。仰せあへずあつあめをいこまき給ふ。頼光此よし聞し召し。御身は都にて誰の御子と問はせ給へば。あつ候。みづからは花園の中納言の。ひより姫にて有りけるが。われらはかりに限らず。十餘人おはします。此ほど池田の中納言くになかの姫君も。捕られていれにまします。愛してたまきて其後は。身のうちより血を搾り。酒をふつけて血をばのみ。有と名づけてあつむらな。剣さ喰はる。悲しさを。側にて見るもあはれなり。掘河の中納言の姫君も。今朝ちを搾られ給ひしごとや。そのかたをわれくが。洗ふこ

人々も。びに。びに。びに。びに。共に涙にもせび給ふ。頼光仰せけるやうは鬼をたやすく
 平げ。御身達を悉く都へ返さん其爲に是まで尋ね参りたり。鬼の柝を懸たひたら
 せ給へ。有りければ。姫君此由聞し召し。是は夢かや現かや。其義ふらは語り申
 さん。此河かみをのぼらせ給ひて御覽せよ。くらがねのついで築地を築き。くらがねの
 門をたて。口には鬼が集りて番をして居るべけれ。いかにもして門より入り忍
 び入りて御覽せよ。瑠璃のくろぐま宮殿をたれ。甍を並べて建て置きたり。四節の四
 季をまわびつ。鐵の御所を名づけて。くらがねにて館をたて。よろにふればその内に
 て。われらを集めて愛せさせ足手をすらすせ起き臥し申すが。らうの口には眷族ご
 とも。くろぐま。熊。虎。かね。四天王を名づけて番を
 させておく。彼ら四人の力の程は。いか程も譬へん方あはさまく。酒吞童子がそ
 の姿。色。うす赤くせいたかく。髪はかぶるにもしみなし。晝の間は人ふれども。夜に

ふればもろろしく。そのだけ一丈餘にして。譬へていはん方もふし。かの鬼常に酒
 を呑む。あひてふしたる時ふれば。わが身の失するも知らぬあり。いかにもしてまのび
 入り。いひてくろぐまに酒をまじり。あひてふしたる所を見て。思のまにうち給へ。鬼
 神は天命つきはてつひには討たれ申すべし。いかにも才覺おはしませ。客僧たちご
 ぞ仰せける。さて六人の人々は。姫君のをしにまひせて。河かみをのぼらせ給へば。
 程もふく鐵の門につく。番の鬼ども。れを見て。こは何ものぞ。めつらして。此に
 人を喰はずして。人をこひける折ふしに。愚人。夏の虫。飛んで火に入るとは。今こ
 そ思ひまられけれ。いざや引き裂きくはんとて。われも。と勇みける。その中に鬼
 ひかり申しけるは。あひて。をまき入するふ。めつらして。き有なば。わたくしに
 ては叶ふま。のみ。御意次第に引きまきくはんとぞ申しける。げに尤ご
 て。それより奥をいしてまわらして。此よ。か。ひければ。童子此よ。聞くより
 も。こは不思議なる次第か。何とぞ對面申すべし。こあたへ。申せ。ありけ



れば。六人の人々を。椽の上にご請^レけける。其後醒き風吹き来り。雷電いぶつま頻
に^レして。前後を忘ずるその中に。色づす赤くせい高く。髪はかぶるにおし亂し。大
がうこのおり物に。紅の袴を着て。鐵杖をつゑにつま。あたりを覗んで立つたは。身
の毛もよだつばかりあり。童子申しけるやはず。わが住む山はつねづね。さまがん
が^レら^レ聳えつ。谷深くして道もあし。天をかける翅。地をはこるけだものまで。道
が無ければ来る事あし。死や面々人として。天をかけりて来たるわや。かたれ。聞か
んぞ申けるし

頼光は聞し召し。われらが^レぎやう行のおらひにて。役の行者ご申し人。みち無き山
をふみわけて。五きせんぎめつまで。鬼神の有りけるに。行きあつて。ド呪もん文を授
けゑ^レきを與へ。今に絶えせすことごとく。あるべきをあたへ憐むあり。此客僧も流
を汲む。本國は出羽の羽黒の者ありしが。大峯山に年こもり。やうく春にもあ
りければ。都一見そのためにもふ。夜をこめて。たち出でたるが。せんのなづよりふみ

迷ひ。道あるやうに心えて。是まで来りて候あり。童子の御目にかゝる事。ひんげに
えんのぎやうの御引き合せ。何より以て嬉しく候。一樹の蔭。一河の流を汲
む事も。皆これ多少の縁と聞く。御宿をすしおし給へ。御酒をもたせ候は。恐
れおびら童子へも御しめひつし申せん。我等も是にて御酒給はり。終夜をわもり
せんぞ申せける。童子は此よし聞くより。かたは苦きうもま入か。椽より
上へおびあげ。猶も心をきらしたため。童子申せけるやうは。またせの御しものあり
なきへ。われらも又客僧達にも御しめひつし申せん。それく有りければ。うけ
給はる申して。おけん名つけて血を搾り。鏡子に入れて盃へ。童子が前にぞ
おせける。盃を^レ盃盃りあげて。頼光に^レおせしけれ。よりみつ盃を^レあげてい
れも^レおせしけれけり。酒吞童子が是を見て。その盃を次へいふ。うけ給はるんて
廻廻ます。廻も盃を^レいひ。かたは^レおせしけれ。おせしけれ。おせしけれ。おせしけれ。有
は^レおせしけれければ。うけ給はる申して。今きりたるおせしけれ。肘の股を

板にする。童子が前におきかける。童子此よし見るよりも。それよして参らせし。
 うけ給はるるたつ所を。よりみつは御覽にて某よし給はるる。この酒の
 ぞよするらむべき。歳四五寸おし切りて。舌打ちしていふやまぬりけれ。網は此よし
 見るよりも。御心この酒のむきたまふ。某も給はらる。これも四五寸おし切りて。
 この酒のむきたまふはけれ。さうして此よしみるよりも。客僧達はいかふる山に住
 み馴れて。かくはめづらしき酒肴を。まなる事さふしきふれ。頼光は聞し召し。
 御不審は御心むりあり。われらが行のあらひにて。さひこて給はる物あれば。たごひ
 心にうけおさむ。いふやまぬ事更にふし。いかにかやうの酒肴を。くふに浮みといは
 れあり。討つも討たるも夢の中。即神即佛是ふるある。くふに二つの味あし。わ
 れらもくふに浮ぶふり。あらむたけおさむいすれば。鬼神にむらうふかこむや。
 童子も却りて頼光に。らいはいするらむ嬉しけれ。童子申されけるやうは。心にぞ
 まぬ酒肴を。参らせけるらむ悲しけれ。餘の客僧へはむむく^{無益}て。いかにてぞみえ

にける。其時頼光座敷を立ち。件の酒をとり出だし。これは又都よりの持参の酒
 にて候は。恐むびら童子へも御しむひつじまるらせん。御心るみの爲に。頼光
 一し^{神便}酒呑童子にかけける。さうして盃うけあり。これもさうさうはなれ
 たり。げにも一^{神便}んべんありがたや。不思議の酒のこぶれば。その味甘露の如くに
 て。心も詞もなまはれず。斜ららずに喜びて。わが最愛の女あり。よび出だして吞ま
 せん。さうしてたごひのひめきみ。はかぞの姫君をよび出だし。座敷にたぐ。頼光
 此よし御覽にて。これは又都よりの上臈等にまぬらせん。お酌にこそはなけれ
 れ。童子あまりの嬉しきに。あひほれ申しけるやうは。それがしが古をわたりて聞
 かせ申すべし。本國は越後の者。やま寺さなりのち^兒ありしむ。法師に如あるに
 り。数多の法師をよし殺し。その夜に比叡の山につき。我が住む山ぞと思ひし
 に。傳教といふ法師。佛たちをわたりて。わがたつ松をて追ひ出だす。力及はず山
 をいで。又此みねに住みしとき。弘法大師といふえせもの。封じてこころをも追ひいだ

せは。カおははの處に。今はさるるの法師もあはし。さるるの由に入定にふらふらふ。今又
さるるにさるる歸り。何ゆ子細も候はず。都よりいひおほひにさるる土もさるる歸りてさるる。思
のまじらるるつゆのみ。座敷のてのを御覽たま。瑠璃の宮殿にさるる玉をたれ。巻をさる
へたてもさる。萬木千草の前に。春かと思へば夏もあり。秋かと思へば冬もあり。か
る座敷のその内に。鐵の御所をさるる。さるるにさるるのななだ。さるるにさるればさる
内にて。女房たちをさるるつゆもさる。及手をさるるさるる起り臥し申す。いひさるる諸天王
の身おしりもさるるにはいひさるるさるるさるる。おれもさるるにさるるは。都の中におくれさ
き。頼光を申して大悪人のつはものあり。カは日本におらびさる。又頼光が郎黨
に。さるるたみつするだけ。さるるさるるつゆ。ほらさるるつゆ。いひれも文武二道のつはものあり。
これら六人の者さるるさるるにさるる候あり。それをいひさるる申す。さるるさるる春の事
さるる。某がめつしつゆ。さるるさるる千つゆ。思を都へ使ひのほせ。七條の堀
河にて。彼のつゆに渡り。さるるさるる。さるるさるる。さるるさるる得て女のすむたに状をいひ。つゆさる

たりにならさる。髪むじりん執り。つゆさる。來んせしつゆ。さるるさるるつゆ。此よさるるさ
も。三尺五寸さるるさるる。さるるさるるさるるさるるさるる。水もたまるさるるさるる。さる
し。武略めづらして。さるるさるるを取りつゆ。今は子細も候はず。さるるさるるさるるつ
か。さるるに。われは都に行くさるる。其後さるるさるる。頼光の御姿を目を
もはさるるさるるさるる。さるるも不思議の人トや。御身がさるるを能くみるに。頼光に
てはさるる。さるるさるるのつゆはさるるさるるが肘を切りしつゆにあり。のさるる四人の人
々は。さるるたみつ。さるるだけ。さるるさるる。さるるさるるさるるさるるさるる。われらが見る
めはさるるさるる。さるるさるる。さるるさるる。われにさるる思ひさるる。さるるさるるして怪我
するさる。われらさるるさるるさるる。色もさるるさるるさるるさるる。頼光此よさるる御覽に
て。さるるを陳し損ずるさるるは。さるるの大事もさるるさるる。さるるより文武二道の入おれ
は。さるるさるるさるるさるるさるる。さるるさるるさるるさるる。さるるさるるさるるさるる。この仰せさるる
日本一のつゆは。この由快さるるさるる。さるるさるるさるるさるる。さるるさるる。名を聞

略はるるがたしきつらるるを。頼光此よし御覽にて。まじ御とも一つ申せんとて。並び居
 たる鬼どもに件の酒をよりたまへば。五職六符にきみりたり。前後もつらに辨へず。
 やうしうまの中心。いへも童子はまじ申して舞ひたりけり。「都よりいかある人
 の迷ひ来て。酒肴のむかしはある。おもひ返し二三とて。酒や肴にふすべしこの
 歌のうらもほえたり。おびて頼光お酌に。うらなはたれけれ。うらうらひける益を。つひ
 は此よしみるも。まじ申して。うらなはたれけれ。うらうらひける益を。つひ
 風をひて。うらなはたれけれ。うらうらひける益を。つひ
 りげれ。此歌のうらもほえたり。おびて頼光お酌に。うらなはたれけれ。うらうらひける益を。つひ
 うたのこを。鬼はまじ申して聞か知らず。めらめらこら感づつ。次第々々にあひ
 ぼれど。うらうら申せぬけり。うらうらひける益を。つひ
 め申すべし。それがおびたいかんに。二人の姫を殘し置く。それに姑くおやみあ

れ。明日對面申すべしとて。うらうらは奥にぞいりにける。殘る鬼ども。うらうらの聲を
 せ給ふを見て。此處や彼處にふしたるは。おらから死人の如くあり。頼光此よし
 御覽にて。二人の姫君を近づけて。御身たちは都にては誰の姫に。まじ申すべし。
 さん候。みづからは池田の中納言く。いたかのひより姫にてありけるが。近き程に
 られ来て。戀しきふたりのうち。母や。おらやめのうらに逢ひませ。おらやまのうらに逢ひませ。
 は。あはれおら。おらやまのうらに逢ひませ。おらやまのうらに逢ひませ。おらやまのうらに逢ひませ。
 給へば。さん候。みづからは吉田の宰相のおら。姫に。おらからひけるが。中々命のきき
 せ。おらやまのうらに逢ひませ。二人の姫君諸共。おらやまのうらに逢ひませ。おらやまのうらに逢ひませ。
 うに泣き給ふ。頼光此よし聞し召し。おらやまのうらに逢ひませ。おらやまのうらに逢ひませ。おらやまのうらに逢ひませ。
 身たちを都へ御とも申して。戀しきふたりのうち。母に見參らせ申すべし。鬼の臥所
 をわれし。導き給へりければ。姫君たちは聞し召し。是は夢かやうしうかや
 ぬ。其儀にてあるならば。鬼のふしをわれし。おらやまのうらに逢ひませ。おらやまのうらに逢ひませ。おらやまのうらに逢ひませ。

あはれなりければ。頼光斜に思ひ召し。其儀にて候はば。面々物の具を給ふて。まじい傍に忍ばれける。よりみつの出でたは。らんとんがしん申して。緋おとしの冑を召し。三丁の神の給ひしほしおふ。おふけの獅子王の御甲おし。かざり召されし。ちすめん申し。るるる持し。南無や八幡大菩薩の心に。祈念して進み出で給ふ。残る五人の人々も。思々の冑を着。いづれも。あらのつるぎを持ち。女房たちをまき。心静に忍び行く。ひろき座敷を。こすきて。石橋をうち渡り。内のていを見給へば。皆々酒に。あひふして。たぞ。おむる鬼も。乗りに。えのり。え見給へば。おは。廣き座敷の中に。くろがねにて。やめたを。たて。同一扉に。鐵の太き。くわんぬき。と。立て。凡夫の力にて。中々内へ入る。まやうは。ふ。廓のひまより。うち見れば。四方に。燈火高く。たて。鐵杖逆鉾。立て。並べ。童子が姿を見て。あれば。冑の形。おは。はりは。そのたけ。二丈あまり。にして。髪は赤く。倒に。髪の間より。角生ひて。鬚髯も。眉毛も。繋り合ひ。足手は。熊の如く。たて。四方へ。足手を。うち投

げて。ふ。なる姿。見る。た。身の毛も。な。つ。は。あり。あり。あり。三神。あら。は。れ。給ひ。つ。六人の者。ご。も。能く。これ。ま。で。参り。たり。より。お。む。る。思ふ。は。鬼の足手。を。わ。れ。鎖にて。つ。お。ぎ。つ。四方の柱に。結。び。つ。けて。動く。氣。色。は。あ。る。ま。さ。だ。より。み。つ。は。首。を。切。れ。残る。五。人。の。者。ご。も。は。あ。ら。ま。さ。に。と。ま。は。り。お。ん。に。切。り。す。て。予。細。は。の。ら。の。た。ま。ひ。て。門の扉。を。お。開。き。お。き。消。す。や。う。に。失。せ。給。ふ。三。丁。の。神。達。の。い。れ。ま。あ。ら。は。れ。給。ふ。感。涙。肝。に。銘。一。つ。た。の。こ。思。ひ。し。頼。光。は。お。の。方。に。た。ら。ま。は。り。ち。す。め。を。す。り。り。お。き。給。ひ。て。南。無。や。三。丁。の。御。神。ち。を。協。せ。た。び。給。へ。三。度。ら。い。して。切。り。給。へ。鬼。神。も。あ。ら。見。開。き。て。お。お。け。ら。客。僧。達。い。つ。は。り。お。し。聞。き。つ。ら。い。鬼。神。に。わ。ら。い。お。き。物。を。起。さ。あ。ら。ん。と。せ。し。か。ん。も。足。手。は。鎖。に。つ。お。が。れて。起。く。く。ま。の。め。ら。れ。は。お。ら。あ。め。び。て。け。る。雷。電。い。お。し。天。地。も。ひ。く。は。り。お。り

もつより兵ども。ならばやにすん〜にきり給へば。首は天にぞ舞ひあがる。頼光を
 目にみせし。口一齒にんたひし。ぼしめおんに恐をふし。その身に子細はあかり
 けり。足手廻まで切り。大庭まで出て給ふ。數多の鬼の中に。いはらき童子の
 名のりて。手を討つてはらに。手並の程を見せんとて。たもてもふらすひりけり。つ
 ちは此よし見より。手ぶみの程を知りつらん。目に物みせてくれんとて。おひつ。ま
 くりつ。暫し程戦ひけれども。たらに勝負はみえどりけり。おし並へてむすの組み。
 うへを下へんも返す。つぶが力は三百人。いはらき力や強かりけん。つぶを執つて
 おし伏せたり。頼光此よし御覽下て。走り掛つていはらき細首ちうにうら落せ
 ば。いしくま童子。かれごうし。其外門を固めたる。十人あまりの鬼どもが。此よし
 を見るより。今はごうしもまします。いつくを住所ごふすまき。鬼の岩屋も崩
 れる。なめき叫んであかりける。六人の人々。此よし見給ひて。おんこのやうはらや。
 手ぶみの程を見せんとて。習ひ給ひしひや^兵つぼうをうり出たせ給ひて。あふたふら

たへ追ひつめて。數多の鬼ども悉く平けて。姑く息をそつがれける。頼光仰せけるやう
 は。いかに女房たち。早々出でさせ給ふべし。今は子細も候ま〜と仰せければ。此
 めを聞くよりも。捕られてまします女房たち。囚のうらより轉び落ち。頼光を目にか
 けて。これは夢かや現かや。われをも助けてたご。われも〜と手を合せて。數き悲し
 む有様を。物によく〜譬ふれば。罪深き罪人が。獄卒の手に渡り。無限地獄に
 落されしを。地藏菩薩の錫杖にて。おんかあかみせんといそわかご救ひごらせ給ひ
 しも。かくやご思ひ知られたり

其時六人の人々は。姫君を先にたて。奥の體を見給へば。宮殿樓閣玉をたれ。四
 節の四季をまらびつ。薨を並べてたてたるは。心も言もおよばれず。また傍を見給
 へば。死骨白骨生しき人。或は人を酢にして目もあてられぬが中に。十七八の上臈
 の片腕おとし股がれ。いまだ命はきかたあらずして。泣き悲しみてまします。より
 みつ御らんて。あの姫君は都にて誰の姫君にてましますや。姫君たちは聞し召

し。入候。あれは。相河の中納言の姫君にて候なり。急ぎよはに走り寄りて。いかに姫君。いたはしや。みづからとまは。客僧たちの。鬼巻く平げて都へつれて歸らせ給ふが。御身一人殘し置きて歸るべきや。悲しむが。かく恐ろしき地獄にも。御身にこの引かされて。跡にこの殘るが。髪搔き撫で。何事にては御心に思ひめがら。事あらば。われに語らせ給へ。都へ上りて候は。父母にまことに届けて參らすべし。姫君いかにありければ。此よし聞しめし。羨しの人々や。かくあたまとき露の身の。早くは迎の人をくだすべし。暇申して。からは。まの憂き洞を立ち出で。谷嶺過ぎて急がせ給へ。程もふと大江山の麓あり。まもむらの在所につく。よりみつ仰せけるは。いかに所の者ごも。急ぎて入まを觸れさせて。女房たちを都へ送るべし。いかに。ありければ。うけ給はる申すとき。其ころ丹波の國司をば。大宮の大臣殿と申しけるが。此よしを聞し召し。まてもめでたき次第にて。急ぎつぎつぎの馬のり物にて。人々を都へ送り給ひけ

り。都にはこの事を聞くよりも。頼光の御のぼりを見物せんとて。まめき渡りてひかへたり

おまに消えませ。かやうの姿を入々に。みせまらするはづかしや。都にのぼらせ給ひて。ち母の此事をまろしめされおは。わが身のことを中々に歎き給はん悲しや。記念は思の種ふれど。姫がわたみこの給ひて。わが黒髪を切りてたべ。又此小袖はみづから。最後の時ま。著たる小袖このたまひて。その黒髪をおし。みて母上ま。參らせて。後世をば。うてたび給へ。よく。届けてたび給へ。いかにあれなる客僧達。かへらせ給は。そのま。みづからには。めを。給はれて。消え入るやうに泣き給ふ。頼光此由聞し召し。げに道理あり。いかりや。かり。都にのぼりて候は。ち母に此を。業内申し。明日にも成るから。その中に姫を捕られし。池田の中納言夫婦の人も出で給ひ。いづくま。逢ひ次第。迎に出で。給ひし。よりみつを見つけた。すは。是

の給へば。はち姫君も御覽下て。母上をまごて泣き給ふ。母上は此よし御らん下
 て。するしつと走り寄り。ひめ君にこり付きて。是は夢かや現かや。消え入るや
 うに泣き給へば。中納言も聞しめし。一度別かれしわが姫に。二たびあふこそ嬉し
 けれど。急ぎ宿所にかへらせ給ふ。よりみつは参内あり。帝敬覽ましつて御感
 は申すはかりふし。御褒美限りあかりける。それより國土安全長久に。なをまる
 みいづからふりにけり。

彼の頼光の御手柄。ためしすくふさまもみりて。かみ一人より志も萬民に至る
 まで。感ぢるものにはなつかし

横笛草紙

の給へば。はや姫君も御覽じや。母上をまよとて泣き給ふ。母上は此よし御らんじや。すまじく走り寄り。ひめ君に寄り付きて。是は夢かや現かや。消え入るやうに泣き給へば。中納言も聞しめし。一度別かれしわが姫に。二たびあふこそ嬉しけれど。急ぎ宿所にかへらせ給ふ。よりみつは参内あり。帝最覽まじくして御感は申すばかりふし。御褒美限りふかりける。それより國土安全長久に。をこまるみよんがふりにけり

彼の頼光の御手柄。なめしすくおさまゆみどりにて。かみ一人より志も萬民に至るまで。感はるものはおかしき事

横笛草紙

横笛草紙

中ごろのよるにや。けんれいも入ぬの御とき。あるも。よるふとて。二人の女房待
りけり。あるもは平家のとき。越前の前司よりつづきあらいあいらしてくだり給へり。
今一人のよるふとて。あつむるに。まはれふる事どもあり。そのかた
ち。容顔美麗にしていつくしく。かすみに匂ふはるの花。かせにみたる、青柳の
いとたをそかに。あきの月に。あつむる。彼頃。都に聞え給ひし淨海入道どのに。う
へこそ人ぞあかりける。津の國兵庫に都を立て。後の世までのかたみと思し召し。
つき島をぞつかれたる。殊に末代まで絶えずとこや。其御子小松どのの御うらに。三
條のさいたう。たきぐさのりて。花やあふるをのこあり。まはつどのの御つかひ
に。女院の御所へ参りつ。あつむるのうちへ入り。めんらつに。あすらひ。物申さ
んと窺ひたる所に。横笛櫻がたれの薄きわに。紅の袴のそばをどり。身を押ししの

けて出でたるゆたち。をんげんとして楊貴妃李夫人も。是にはむかひ優るべきまじき
覺えける。よて瀧口末より出だし。よく御返事御申しさふらへんが。やびりけさむ
うらりはさむかひにける。

あまの田のかりそめふしのみかりとも。きみがまくらをみるよしもあふ
うらむ顔うちあめぞうけ取り参らせたる。御返事は。よの入してぞ出だし
ける。なきうち御所より入りて。いそらにめいあむ。ねもせす。おもはせす。らじわ
をの夢にも。思ひ分きたるむたまふし。いかにかへつらまはすこし。たなよりりぞび
見せければ。ある時あのかたはさひ給ひ。御心のちを懇に御物語候へ。いわく
かやうにいたるらむ御護を見まらむ。いかにかへつらまはすこし。たなよりりぞび
申しければ。なきうち打ちつけのたまふは。いつぞや。女院の御所へ御使に参り候
ひし時。よらまのちを一目みし。また時忘るひまもあなく。しむ思ひ
はうしみ火の。けりいはむにせむ入す。うら思ひはますかみ。かまよりなるは

おしりか。懇に語りければ。その御事にてうらまは。やすき御事にて候や。御文
あそばし候へ。女院の御所へ常々みづから参り候へ。御機嫌よき時に申さん
か。世にたのましく申し侍りければ。なむべらめまのいれこ。こももあめ
ひ。紅のなごかく櫻なみつけたるを引き重む。すみすりあひ。筆なぞめ。心のうち
を書き附け。むか結びてぞしたしける。あのか文給はりて。女院の御所へ参りけ
る。たなはひの。たなはひの。たなはひの。あのか文給はりて。女院の御所へ参りけ
は何かを物語らむ。こひみづのなごかくの。あのか文給はりて。女院の御所へ参りけ
りし。御身はいまだ若くも。あのか文給はりて。女院の御所へ参りけ
あそばし給へ。うらのの。あのか文給はりて。女院の御所へ参りけ
らむ。あのか文給はりて。女院の御所へ参りけ
たなはひの。たなはひの。たなはひの。あのか文給はりて。女院の御所へ参りけ
へん。あのか文給はりて。女院の御所へ参りけ

よむ木」の書きたりしを

人はいふ所ありしをよむ。我々の書きたりしをよむるは

君の書きたりしをよむ。わが書きたりしをよむるは

横笛申しつらふ。くすの下葉は。われ愛しむるは。さうじの

身は。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

のたのみの。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

心をたへんと。野中の清水は。人にうはれず。ひかりすも事あり。埋火は。い

がれて。もの思ひの。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

今は何をいひて。参らせん。横笛殿へ。此文参りて候。御返事取りて

を申す入の候あり。われは人間の習は。一樹のむげ。一河のむげをくも事は

たまたまの。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

聞き傳へ候。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

目見参らせ候より。御面むげのむすられな。遂に。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

は。入をば入。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

申し侍れ。中。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

の。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

の。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

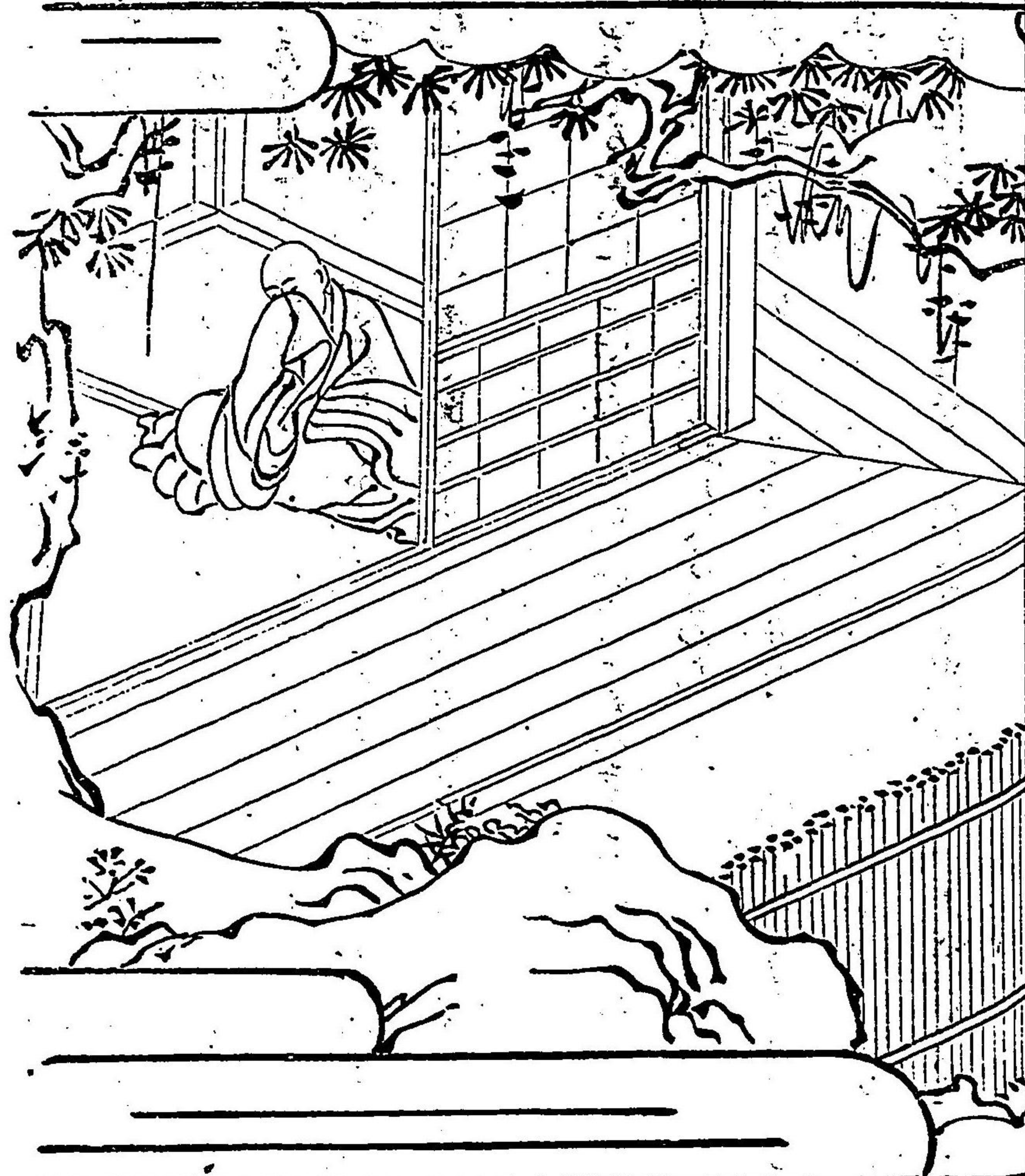
の。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

た。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

御返事取りて歸りけり。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

の中を哀ある。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは

ぐら。是を見て。いづれのや。いづれのや。わが書きたりしをよむるは



横笛草紙
 卷之九
 第十一
 横笛草紙
 卷之九
 第十一



明治廿四年四月五日印刷
同 廿四年四月十日出版

明治廿四年四月五日印刷
同 廿四年四月十日出版

版權所有

校定者

今泉定介

東京小石川區
西江戸川町一番地

同

昌山健

同牛込區築土八橋町
廿三番地

發行者兼
印刷者

吉川半七

同京橋區南傳馬町
一丁目十二番地

發賣人

林平次郎

同日本橋區箔屋町
八番地

關西大
販賣所

松村九兵衛

大坂市南區心齋橋
南一丁目



斗C85

各府縣發賣所

東京日本橋通三丁目
 同 京橋尾張町堀
 同 神田三神保町
 大坂備後町
 同 北久太郎町
 同 久寶寺町
 同 心齋橋南
 京都新町通
 同 河原町二條下
 熊本新二丁目
 神戶相生橋東
 佐賀白山町
 飛騨高山
 岐阜米屋町
 愛知名古屋本町
 静岡新通一丁目
 同 掛川
 石川金澤
 新潟新潟市
 同 水原
 同 長岡
 同 同
 同 加茂

丸善書
 東海書
 良明邦
 中屋龜
 梅原龜
 柳原佐兵
 三木佐
 嵩山
 大黒利書
 長崎次書
 熊谷久榮
 河内壯
 辨屋重兵
 三浦源
 川瀨代
 勝原儀
 三見甚
 近田太
 西林富
 西村六
 目黒十六
 上田屋治
 丸山音

新潟三條
 長野善光寺前
 同 小松本
 同 小諸
 山梨甲府八日町
 群馬前橋曲輪町
 宮城仙臺國分町
 同 同
 同 同
 同 同
 岩手盛岡中橋通
 山形八日町
 秋田大町
 北海道函館
 同 札幌
 福島福島町
 栃木宇都宮町
 茨城水戸市上市泉町
 同 土浦町
 同 石岡町
 同 古河町
 千葉佐原町
 同 東金
 同 千代田
 同 佐倉

樋口小左衛門
 西澤喜太郎
 水琴傳
 小山明次
 五山
 煥乎
 金港書
 高藤書
 正藤書
 便益書
 五十嵐太右衛門
 本間金之
 魁文男
 石塚左男
 萱間左男
 正左男
 川又銀
 伊沼彌
 高水清
 高野正
 朝野利兵衛
 多田屋本
 村山書房

